

◆民族のこころ(149)◆

現代の黄金話

蝦名 大助*

ペルー共和国のクスコ市周辺でケチュア語の調査を始めてから10年以上になる。当初は調査協力者探しにも一苦労したものだが、知人・友人が徐々に増えたおかげで、近頃は随分と楽になった。ペルーでは、共通の知人を介してでなければなかなか物事が進まない。特に、campesino（農村民。南部のアイマラ語話者を除けば、ほぼすべてがケチュア語話者である）は人見知りで、いきなり村に入っ



クスコ南部アコマヨ郡にある湖。この辺には、インカではなく、かつてスペイン系農場主が埋めた金があるという。

たところでなかなか相手にしてもらえないので、知人のつてを頼っていかなければならない。

最近、そのような若い友人の一人からインカの埋蔵金の話を聞かされた。クスコはインカ帝国の首都だったところであり、当時は金が大量に集められていたといわれている。その金の一部がまだ地中に眠っているというのである。

埋蔵金話は、かつて調査に協力してもらっていた年配者からも聞いたことがある。いわく、「山で光るものを見た」とか、「ある男が金を見つけ、家族は金持ちになったが、見つけた当人は死んでしまった」とかいうものであるが、あまり具体的にないので、当時は話半分で聞いていた。このような話が信じられないのは、その「ケチュア的」な語り方のせいでもある。すなわち、直接体験と伝聞とははっきり区別されるが、伝聞の中で作り話かそうでないかの区別がはっきりしない。例えばkukuchi（幽霊）やsuq'a（古代人が生身の人間の姿で現れる）の話など広く伝わる物語と、そうではない日常的なうわさ話とが同列に語られるのである。

ところが最近話をしてくれたこの若い友人はスペイン語しか話さず、ケチュア的な考え方を多少残してはいるが、大概のことは科学的に考える男である。そこで私も興味をひかれたのだ。その後の話では彼は実際に金探しに行ってみたという。車が入らない山道を何時間も歩いたところに遺跡があり、地面に沢山穴が掘られていた。そしてその穴の中にはpago（大地への供養、供え物）がしてあったという。伝統的には、農作物など、大地から何かを得る際には必ずpagoをしなければならない。pagoをしなければ大地に食べられてしまう。よってpagoがしてあるということは、何かを掘り出した証拠だというわけである。

事実かどうか、現物を見てみたいという気持ちはある。しかし残念ながら他人を促す訳にも、まして自分で行ってみる訳にもいかない。遺跡を掘り返すのはおそらく違法であり、強盗に出会う危険もある。村人にとって遺跡が何らかの重要な意味を持っているかもしれない。それに、先の年配者の話（金を見つけた男が死んでしまった）もあながち荒唐無稽とは言えない。共同体の中で特定の人間だけが豊かになることが忌み嫌われるという、伝統的な考え方を反映していると思われるからである。

インカの遺構・遺物は遠い過去のもので日常生活から切り離されているわけではない。現在でもクスコ周辺には無数の遺跡が存在し、石組みをそのまま利用するなど、人々は物理的に遺跡に非常に近いところで生活している。上に挙げたsuq'aの話もこのような環境と密接に関連している。しかし伝統的な生活様式や物の考え方はやはり徐々に変わってきている。上の二人に見られる考え方や行動の違いは、このような変化の表れだといえるかもしれない。ケチュア語の調査を続ける間に、一度は山奥の農村に入り、より伝統的な生活に触れてみようかな、と思うこともある。

*明海大学非常勤講師